

# 肌の悩みと肌に対する心的イメージ

## ——肌の明るさと色みの言語選択における悩みの特徴間比較——

### Differences in Mental Imageries of Various Skins between the Types of Distress for Their Skin Colors

——A Study of Comparison though Word Choices on Lightness and Hue——

山田 雅子

YAMADA Masako

**要旨：**女子短期大学生36名を対象に調査を行い、回答者自身と他者としての男女の肌に対する心的イメージを言語的選択傾向から捉え、肌の色に対する悩みとの連関を分析した。この結果、自身が色黒であることを悩む回答者は、回答者自身の現在に対する評価が相対的に色黒・黄みに寄る、男性の理想的イメージが色黒にやや偏るなど、自身の肌の明るさに対する悩みによって心的イメージにも違いが生じることが明らかとなった。また、肌の色みに悩みがある場合には、現実に対する自己評価とは逆の色みを理想として求めることが分かった。いずれも悩みのない群と傾向を異にすることを示す結果であり、悩みによって自分自身の肌の色が意識されることにより、各種の肌に関わる心的イメージにも変化が生じる可能性が示唆された。

**キーワード：**肌、肌色、男女差、ジェンダー、イメージ

#### 1. はじめに

肌は均質で安定したものではなく、いつ、どの部分に注目するかによって様相にも相違がある(児玉・棟方, 1998)。色彩学が扱う中でも極めて複雑で難しい側面を持つ対象のひとつが肌であるが、自分自身の肌の色を尋ねられれば、「どちらかといえば色黒」、「赤みがある」など、何らかの表現が可能なのではなかろうか。深く考えれば難しい問いであり、正答を設定できない問題でもあるが、ここで返される内容こそが、不均質性や種々の変化を超越してその人自身に意識さ

れる心的イメージ（心に描く像）に近づく術であると考えられることもできる。本研究は、このような言語的な表現の選択の面から、種々の肌に対する心的イメージを探ろうとするものである。

肌の心的イメージについては、記憶色と色再現に関する報告からも示唆を得ることができる。例えば、実際の肌の色よりも高明度に記憶されていることはよく知られていることである（Bartleson, 1960; 柳瀬ら, 1970）。また、回答者自身の肌について、本人による予測と実測を比較した結果からも、同様に高明度となる傾向が見られている（山田, 2010, 2015）。しかし、明度のずれの程度と色相のずれの方向性には、個人差が顕著に見られるということも併せて報告されている（山田, 2015）。

では、その個人差の背景にあるものは何か。ジェンダー観のような価値観と自身の肌に対する心的イメージの在り方との連関を示唆する研究もある。より具体的には、実際に計測された肌の色と回答者本人が予想した肌の色との明度のずれが小さい回答者の方が、伝統的な性差観を持つとの傾向が得られている（山田, 2015）。また、自分自身の肌の色に対する捉え方によって、自身や一般的に好ましい肌の捉え方が変わるとも報告されている（鈴木, 1997）。これらの研究を踏まえ、本研究では肌の色に対する悩みの在り方が心的イメージにも影響すると仮定し、探索的に分析を進めることとした。

## 2. 方法

### 2.1 対象者

関東在住の日本人女子短期大学生36名（平均年齢18.97歳、標準偏差0.81）

### 2.2 調査時期

2015年9月。

### 2.3 調査内容

各対象者に調査用紙を配付し、次の内容について回答を求めた。括弧内は、調査用紙上に記した実際の教示文である。

質問1 各種の肌のイメージ（次の肌の色の明るさと色みについて、あなたの抱くイメージに近

い段階に○をつけて下さい。)

- |               |              |
|---------------|--------------|
| 1) あなたの現在の肌の色 | 明るさ6段階・色み6段階 |
| 2) あなたの理想の肌の色 | 明るさ6段階・色み6段階 |
| 3) 平均的な男性の肌の色 | 明るさ6段階・色み6段階 |
| 4) 平均的な女性の肌の色 | 明るさ6段階・色み6段階 |
| 5) 理想的な男性の肌の色 | 明るさ6段階・色み6段階 |
| 6) 理想的な女性の肌の色 | 明るさ6段階・色み6段階 |

質問2 肌の悩み (あなた自身の肌の悩みについて、当てはまるものに○をつけて下さい。)

選択肢：にきび 肌あれ 毛穴のひらき ざらつき しみ しわ 悩みはない

質問3 肌の色に関する悩み (あなた自身の肌の色の悩みについて、当てはまるものに○をつけて下さい。)

選択肢：色の黒さ 色の白さ 赤み 黄み 色のムラ 血色の悪さ 悩みはない

以上の質問の他、美しさに関する質問などを併せて設けたが、実際の調査内容の中でも本研究の目的に関する部分のみ抜粋し、本稿では言及しないこととする。

尚、質問1については、各肌の色の明るさ(6件法：非常に色黒/かなり色黒/やや色黒/やや色白/かなり色白/非常に色白)と色み(6件法：非常に赤み/かなり赤み/やや赤み/やや黄み/かなり黄み/非常に黄み)のそれぞれについて、該当する一カ所を○で囲むことを求め、質問2および3については該当箇所を最大で3つまで○で囲むよう教示を加えた。回答時間に制限は設けなかった。

### 3. 結果および考察

#### 3.1 肌の心的イメージと肌の悩みの傾向

##### 3.1.1 自分自身および男女の肌の色の心的イメージ

質問1に対する回答を集計した結果、各種の肌に対する回答傾向は次のFigure 1-1およびFigure 1-2のようになった。各棒グラフの網掛けのパターンは一様ではなく、心的イメージの対

象によって選択結果が変化することがここで把握できる。

各種の肌の色に対する心的イメージの傾向をより詳細に捉えるため、明るさ、色みの回答を数値化し、平均値、標準偏差を算出した。数値化にあたっては、明るさに関する「非常に色黒」を1、「かなり色黒」を2、「やや色黒」を3、「やや色白」を4、「かなり色白」を5、「非常に色白」を6とし、色みに関する「非常に赤み」を1、「かなり赤み」を2、「やや赤み」を3、「やや黄み」を4、「かなり黄み」を5、「非常に黄み」を6とした。

算出された各数値はTable 1-1およびTable 1-2に示す通りである。尚、当該表においては、回答者自身の現在に対する評価と理想、男女の平均的イメージと理想的イメージとの間のt検定結果も併せて記した。また、これらの平均値を基に、横軸に色み、縦軸に明るさをとった散布図がFigure 2である。

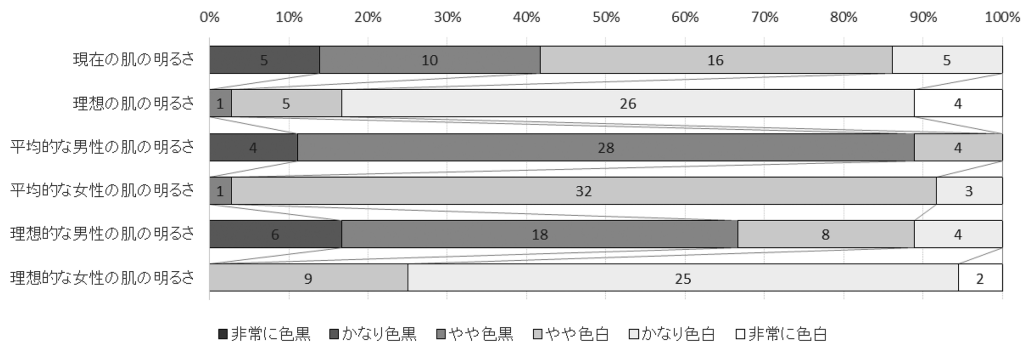


Figure 1-1 各肌の色に対する選択結果（明るさ）

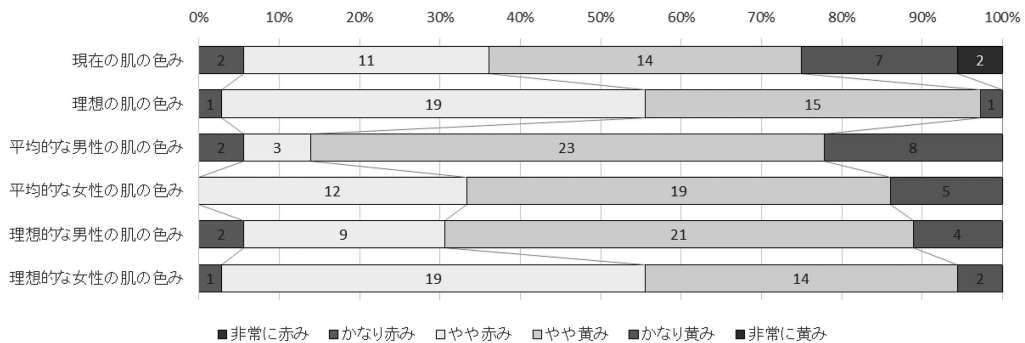


Figure 1-2 各肌の色に対する選択結果（色み）

Table 1-1 選択された各種の肌の色の明るさの平均と標準偏差

	自分自身		男 性		女 性	
	現在	理想	平均	理想	平均	理想
平均	3.583	4.917	3.000	3.278	4.056	4.806
標準偏差	0.906	0.604	0.478	0.882	0.333	0.525
現在（平均）－理想間検定	**		†		**	

※ †p<.10, \*\*p<.01

Table 1-2 選択された各種の肌の色の色みの平均と標準偏差

	自分自身		男 性		女 性	
	現在	理想	平均	理想	平均	理想
平均	3.889	3.444	4.028	3.750	3.806	3.472
標準偏差	0.979	0.607	0.736	0.732	0.668	0.654
現在（平均）－理想間検定	*		*		**	

※ †p<.05, \*\*p<.01

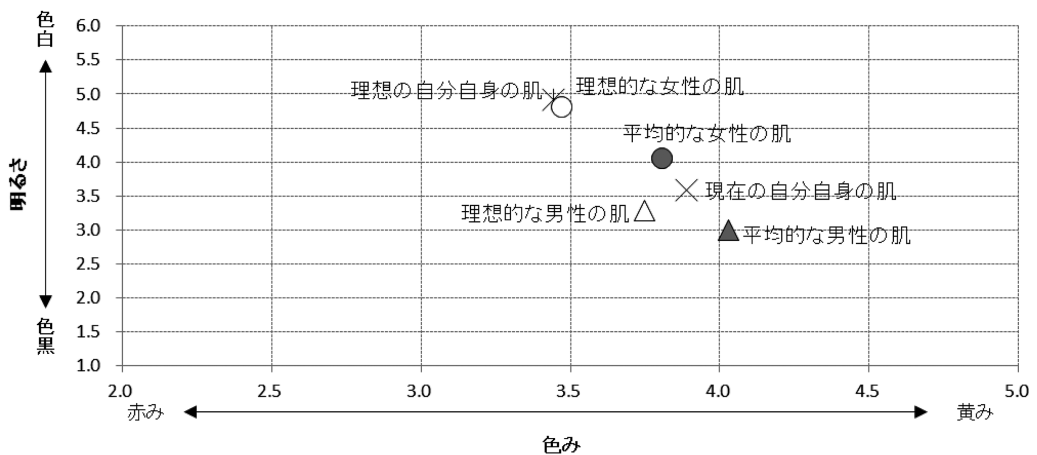


Figure 2 各種の肌の色の心的イメージの布置

明るさ、色みとも、回答者自身の現在に対する評価と理想との間には有意差が見られ、先行研究（山田, 2017）と同様に、現在よりも明るく赤みの肌を理想とする傾向が捉えられた。また、男女の肌に対する心的イメージにおいても、有意または有意傾向の差が見られ、男女共、平均的なイメージよりも理想の方が明るく赤みに寄ることが判明した。先に言及したように、当該傾向は自分自身に対して持たれる理想にも共通するものであり、対象の男女の区別なく、「より明るく赤みの肌を理想とする傾向」が捉えられた。

く、より赤みに」 という方向性が示されたと言える。

対象の男女の設定と、平均・理想のイメージの区別の影響を確認するため、対象の性別2水準（男性・女性）、平均・理想の2水準により、2×2の分散分析を行った。結果、明るさに関してはTable 2-1、色みに関してはTable 2-2の分散分析表が得られた。Figure 3-1およびFigure 3-2は、それぞれ明るさと色みに対する各水準の平均値を表した交互作用グラフである。

Table 2-1 男女の肌の評価に対する分散分析表（明るさ）

	自由度	F値
対象の性別	1	172.487 **
平均・理想	1	27.302 **
交互作用	1	5.764 *
誤差	140	
全体	143	

※\*p<.05, \*\*p<.01

Table 2-2 男女の肌の評価に対する分散分析表（色み）

	自由度	F値
対象の性別	1	4.610 *
平均・理想	1	6.886 **
交互作用	1	0.057
誤差	140	
全体	143	

※\*p<.05, \*\*p<.01

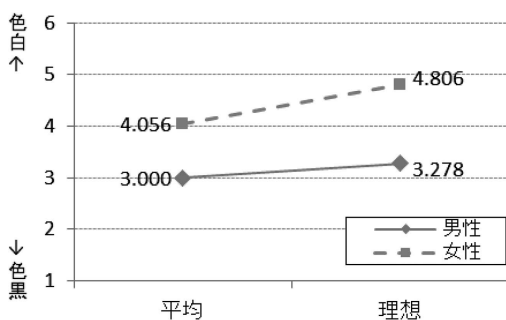


Figure 3-1 2要因交互作用グラフ（明るさ）

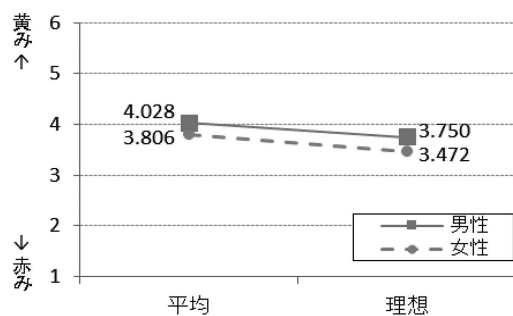


Figure 3-2 2要因交互作用グラフ（色み）

明るさについては、両要因の交互作用が5%水準において有意であり、特に対象が女性の場合において、平均的イメージと理想との間に大きな差が生じることが明らかとなった（Figure 3-1参照）。対象の男女の要因から見れば、特に理想のイメージにおいて対象の男女の差が顕著となり、女性に対してより色白の肌が理想とされると換言することもできる。当該傾向は山田（2017）においても見られているものであり、肌の色における社会的な性差、ジェンダー間の違いが存在することを示すものでもある。

色みの評価に関しては、対象の性別と平均・理想の主効果が有意であり、男性および平均は黄みの方向に、女性および理想は赤みの方向に心的イメージが偏る傾向にあることが統計的にも明らかとなった。当該傾向は、Figure 3-2の実線（男性）と点線（女性）の間隔の開きとしても確認できる。

本調査と同じく言語選択の傾向を分析した先行研究では、「中庸」との選択が大半を占め、明瞭な色みの傾向が得られていなかったが（山田, 2017）、本調査では選択肢から中庸段階を省いたことにより、若年女性が持つ心的イメージの方向性が明瞭になったと考えられる。しかし、実際の男女の肌の色みは当該傾向と全く逆、つまり、男性の方が赤み、女性の方が黄みであるとも言われる（山田, 2008a）。当然のことながら肌の色には個人差があり、部位による差も存在するため、男性なら赤み肌、女性なら黄み肌、のように、単純化できるものではない。思い描く像にも、各個人が視覚的に接触した像の影響を多分に受けていることが考えられる。だが、色票を用いた心的イメージ研究においても本調査と同様の結果が認められているため（山田, 2010）、何故現実の男女差とは逆の方向で色みが記憶されているのか、一層の分析を要すると言える。

### 3.1.2 肌の悩みの実態

肌の悩みに関する質問2および質問3の回答を集計した結果、Figure 4-1およびFigure 4-2が得られた。

にきび、肌あれ、毛穴のひらきについては、いずれも全体の3分の2以上の回答者が選択しており、20歳前後の女子学生に共通した肌トラブルであることが捉えられる。

一方、肌の色に関する悩みはそれぞれであり、「悩みはない」との回答も8名（約22.2%）であった。また、明るさの面では、「色の黒さ」が10名（約27.8%）である一方、「色の白さ」を選択した回答者は0名であり、偏りが見られる。山田（2014）が示すように、女子学生が目指す肌の明るさがほぼ色白方向に統一されていることも読み取れる。

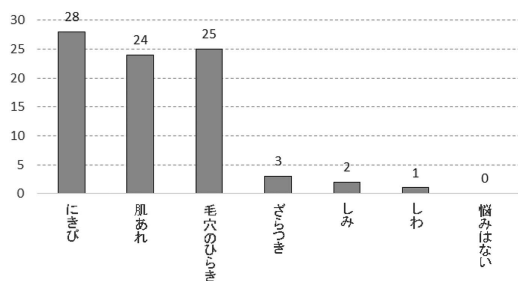


Figure 4-1 肌の状態に関する悩み

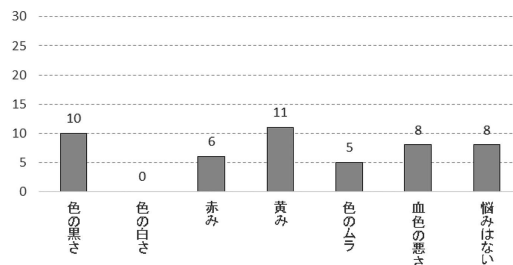


Figure 4-2 肌の色に関する悩み

### 3. 2 肌の悩みと肌の心的イメージの連関

#### 3. 2. 1 色の黒さに対する悩みと肌の心的イメージの分析

3.1を踏まえ、肌の悩みの中でも「色の黒さ」を選択した回答者10名とそうでない回答者26名との間で各種の肌の心的イメージの比較を行った。

Table 3-1 自分自身の肌の評価に対する分散分析表（明るさ）：色黒に関する悩み

	自由度	F値
現在・理想	1	88.076 **
色黒に関する悩み	1	24.686 **
交互作用	1	10.076 **
誤差	68	
全体	71	

※\*\*p<.01

Table 3-2 自分自身の肌の評価に対する分散分析表（色み）：色黒に関する悩み

	自由度	F値
現在・理想	1	12.163 **
色黒に関する悩み	1	1.565
交互作用	1	8.520 **
誤差	68	
全体	71	

※\*\*p<.01



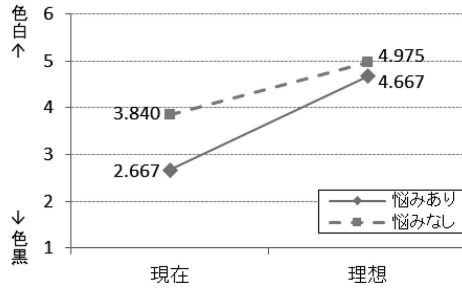


Figure 5-1 2要因交互作用グラフ (明るさ)

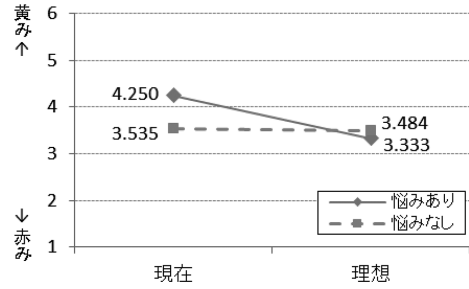


Figure 5-2 2要因交互作用グラフ (色み)

数値化された回答者自身の肌の明るさと色みの回答に対し、現在と理想の2水準、肌の色の黒さに対する悩み2水準（あり・なし）により、2×2の分散分析を行った結果、明るさについてはTable 3-1、色みについてはTable 3-2の分散分析表が得られた。Figure 5-1およびFigure 5-2は2要因の交互作用を表すグラフである。

分析の結果、明るさ、色みのいずれについても現在・理想の区別と悩みのあり・なしによる交互作用が1%水準において有意であった。明るさ、色み共、「理想」に対する回答では色黒に対する悩みの有無の影響が小さく、「現在」に対する回答において悩みによる差が顕著となることを読み取れる。具体的には、色黒に悩む回答者の方が「現在」に対する評価が相対的に色黒寄り、で黄みに寄る傾向にあると言える。

更に、数値化された男女の肌の心的イメージに対し、対象の性別2水準（男性・女性）、平均・理想の2水準、色黒に関する悩みの有無による2水準（あり・なし）により、3要因2×2×2の分散分析を行った。明るさに関する分散分析表はTable 4-1、色黒に関してはTable 4-2である。また、Figure 6-1およびFigure 6-2は3要因の交互作用を示すグラフである。

Table 4-1 男女の肌の評価に対する分散分析表（明るさ）：色黒に関する悩み

	自由度	F値
対象の性別	1	155.357 **
平均・理想	1	16.969 **
色黒に関する悩み	1	0.195
対象の性別×平均・理想	1	8.510 *
対象の性別×色黒に関する悩み	1	2.821
平均・理想×色黒に関する悩み	1	1.853
3要因交互作用	1	2.821 †
誤差	136	
全体	143	

※ † p<.10, \*p<.05, \*\*p<.01

Table 4-2 男女の肌の評価に対する分散分析表（色み）：色黒に関する悩み

	自由度	F値
対象の性別	1	2.820
平均・理想	1	8.508 **
色黒に関する悩み	1	0.420
対象の性別×平均・理想	1	0.251
対象の性別×色黒に関する悩み	1	0.281
平均・理想×色黒に関する悩み	1	1.681
3要因交互作用	1	0.420
誤差	136	
全体	143	

※\*\*p<.01

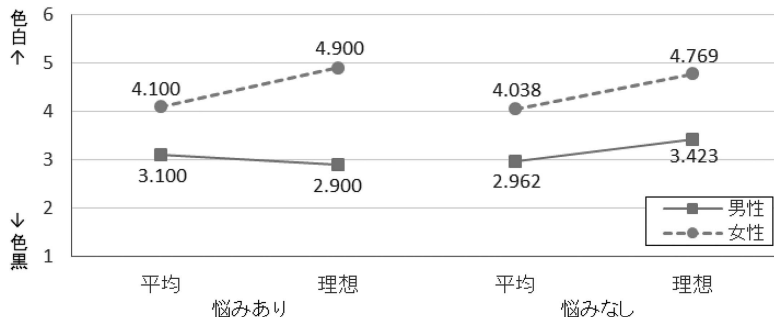


Figure 6-1 色黒に対する悩みを含む3要因交互作用グラフ（明るさ）

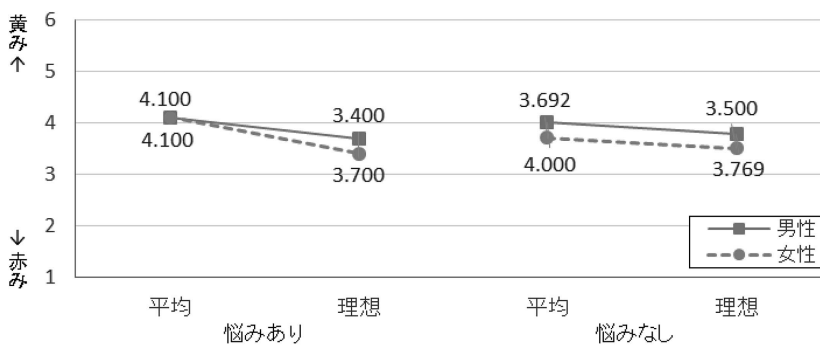


Figure 6-2 色黒に対する悩みを含む3要因交互作用グラフ（色み）

明るさについては、3要因の交互作用が有意傾向であった。僅かな差ではあるが、Figure 6-1では、実線で示される男性の肌の心的イメージにおいて色黒に対する悩みの有無による傾向の違いが捉えられる。色黒に関する悩みがない場合には、対象の男女を問わず、平均的イメージよりも理想的イメージにおいてより明るい肌を求める一方、色黒の悩みがある回答者は男性に対する理想の持ち方が異なり、平均的イメージよりもむしろ若干色黒寄りの肌を望んでいることが分かる。山田（2008b）にも示されるように、「男性は色黒、女性は色白」、或いは「女性は男性よりも色白」という社会通念は強く、その状況は現在でも然程の変化を持たない（山田，2017）。自分自身の肌が色黒であると評価し、その現実を悩みとして捉える場合には、女性である自分自身と異性である男性とのバランスを社会的価値観に合わせようとするため、男性に色黒であることをより強く求めることが考えられる。

色みについては、平均・理想の主効果のみ有意であった。Figure 6-2においても読み取れるように、対象の男女の違いや色黒に対する悩みの有無を越えて、平均的イメージは黄み、理想的イメージは赤みとなる傾向があると言える。

### 3. 2. 2 肌の色みに対する悩みと肌の心的イメージの分析

肌の色みに関する悩みのうち、「赤み」を選択した6名、「黄み」を選択した11名、いずれも選択しなかった残りの回答者19名の間で群間比較を行った。

まず、数値化された自分自身の肌の明るさと色みの回答に対し、現在と理想の2水準、肌の色みに対する悩み3水準（赤み悩みあり・黄み悩みあり・色み悩みなし）により、2×3の分散分析を行った。Table 5-1は明るさに対する分析結果、Table 5-2は色みに対する分析結果を表す分散分析表である。また、Figure 7-1およびFigure 7-2は交互作用を示すグラフである。

Table 5-1 自分自身の肌の評価に対する分散分析表（明るさ）：肌の色みに関する悩み

	自由度	F値
現在・理想	1	48.137 **
肌の色みに関する悩み	2	1.549
交互作用	2	1.160
誤差	66	
全体	71	

※\*\*p<.01

Table 5-2 自分自身の肌の評価に対する分散分析表（色み）：肌の色みに関する悩み

	自由度	F値
現在・理想	1	2.770
肌の色みに関する悩み	2	5.157 **
交互作用	2	17.481 **
誤差	66	
全体	71	

\*\*\*p<.01

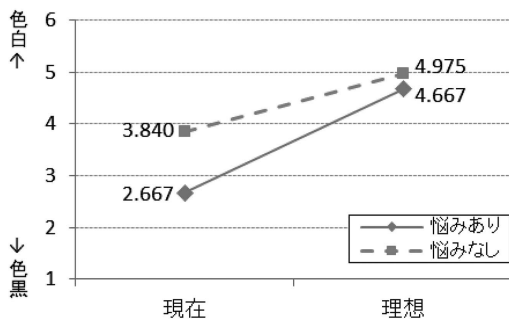


Figure 7-1 2要因交互作用グラフ（明るさ）

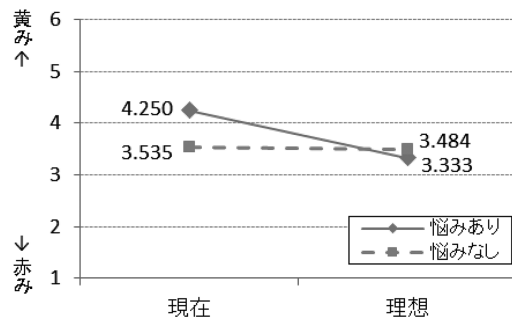


Figure 7-2 2要因交互作用グラフ（色み）

明るさについては、現在・理想の主効果のみ有意であり、理想として現在よりも明るい肌を求める傾向が確認された。一方、色みの悩みによる影響は、明るさに対しては顕著でなかったことになる。

また、色みについては交互作用が有意であり、色みに対する悩みによって回答者自身の現在と理想の捉え方が異なることが確認された。Figure 7-2においても折れ線が交差する状態となっているが、悩みがない場合には現在と理想の差がほとんど見られないのに対し、赤みに悩む場合には現在よりも黄みを、黄みに悩む場合には現在よりも赤みを望むことが分かる。現在・理想の区別による単純主効果は、「赤み悩みあり」「黄み悩みあり」の二者で1%水準において有意、「色み悩みなし」では有意ではなく、先の傾向は統計的にも裏付けられる。「肌の色みに対する悩みがあれば、悩みとは逆の方向の色みを望む」という対応関係がここに確認できたとえよう。

男女の肌の心的イメージに関しても分散分析を行い、対象の性別2水準（男性・女性）、平均・理想の2水準、肌の色みに関する悩み3水準（赤み悩みあり・黄み悩みあり・色み悩みなし）による3要因2×2×3の配置により結果を確認した。Table 6-1は明るさ、Table 6-2は色みに対する分散分析表である。また、Figure 8-1およびFigure 8-2は各水準の平均値を示すグラフである。

第一に、明るさについては対象の性別と平均・理想の交互作用が10%水準で有意傾向であった。Figure 8-1においては、肌の色みの悩みの状況に関わらず、「女性」と「男性」を示すグラフの間に開きがあり、特に「理想」において男女の差が拡大していることが確認できる。当該傾向は先行研究においても認められており（山田, 2017）、本調査でも男性については平均と理想との差が小さく、回答者と同性の女性については「平均」よりも「理想」の方が顕著に明るいことが指摘できる。

色みについては、いずれの交互作用も有意ではなく、平均・理想の区別と肌の色みに関する悩みの主効果の2つのみがあり有意であった。平均・理想の主効果は、3.2.1における分析結果において言及されたように、平均的イメージの方が黄み寄り、理想的イメージの方が赤みに寄ることを示す。一方、色みに関する悩みの主効果に関して多重比較検定を行った結果、悩みのない群と他の2群（赤み悩みあり・黄み悩みあり）との間に有意差が見られ、悩みのない群が最も黄み寄りとなる傾向にあることが捉えられた。逆に悩みのある群は、いずれの設定でも3以上4未満の数値を示しており、赤みと黄みの中間で方向性が曖昧であるとも表現できる。

Table 6-1 男女の肌の評価に対する分散分析表（明るさ）：肌の色みに関する悩み

	自由度	F値
対象の性別	1	146.878 **
平均・理想	1	21.403 **
肌の色みに関する悩み	2	0.395
対象の性別×平均・理想	1	3.654 †
対象の性別×肌の色みに関する悩み	2	0.853
平均・理想×肌の色みに関する悩み	2	0.248
3要因交互作用	2	0.298
誤差	132	
全体	143	

※ † p<.10, \*\*p<.01

Table 6-2 男女の肌の評価に対する分散分析表（色み）：肌の色みに関する悩み

	自由度	F値
対象の性別	1	1.569
平均・理想	1	6.162 *
肌の色みに関する悩み	2	11.856 **
対象の性別×平均・理想	1	0.091
対象の性別×肌の色みに関する悩み	2	2.113
平均・理想×肌の色みに関する悩み	2	0.071
3要因交互作用	2	0.032
誤差	132	
全体	143	

※\*p<.05, \*\*p<.01

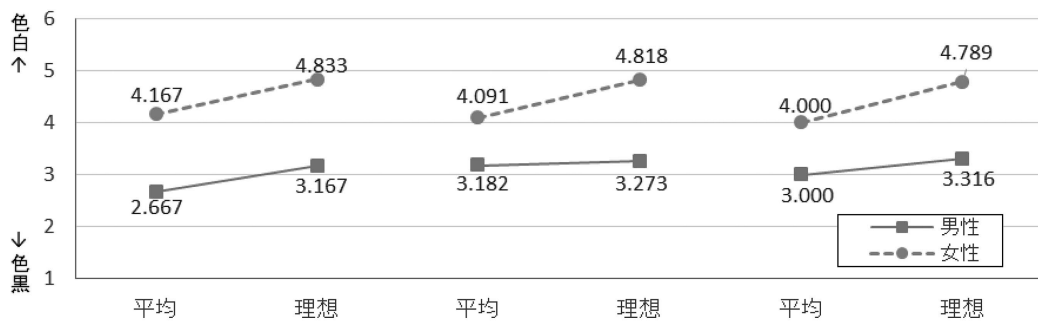


Figure 8-1 色みに対する悩みを含む3要因交互作用グラフ（明るさ）

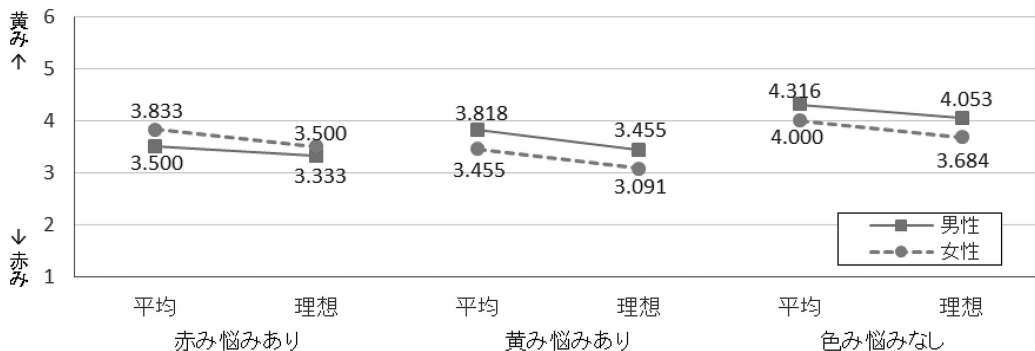


Figure 8-2 色みに対する悩みを含む3要因交互作用グラフ（色み）

興味深いことに、Figure 8-2では、赤みの悩みがある回答者のグラフと黄みの悩みがある回答者および色みの悩みがない回答者のグラフとでは、男女の折れ線の位置関係が逆転している。赤み悩みがある回答者にとっては女性の方がより黄み寄り、黄み悩みがある回答者にとっては女性の方がより赤み寄りと位置づけられているように見える。Table 6-2において確認できるように、肌の色みの悩みと対象の性別の交互作用は有意ではなかったため、平均的イメージと理想的イメージの二つにデータを分けた上で平均・理想要因を省いて再分析し、対象の性別と肌の色みに対する悩みの交互作用を確認したところ、平均、理想共有意ではなかった。つまり、対象の性別によって肌の色みに対する悩みの作用が異なる、或いは、肌の色みに対する悩みによって対象の性別の影響が異なる、といった関係性は見られなかったことになる。

悩みが意識されることによって、他者としての男女の心的イメージにも差異が生じるとすれば、その人自身によって作り上げられた心的イメージによって、逆に悩みが再生産され続ける可能性もある。本調査では、統計的に有意な傾向は掴めなかったが、心的イメージという枠組みによって悩みが作り上げられる構造について、今後更に深く調べていくことも有用であると考えられる。

#### 4. 総合考察

本研究の目的は、肌の悩みの特徴と肌に対する心的イメージの連関を探ることにある。本調査結果を踏まえ、特に色黒に対する悩みと肌の色みに関する悩みを取り上げたが、群間比較により、各悩みを持つ回答者の特徴が明らかとなった。Table 7-1およびTable 7-2は、各悩みのある回答者の特徴をまとめた表である。

これらの表から特徴として捉えられるのは、心的イメージにおいても、悩みの属性と同じ属性で影響がもたらされるということである。すなわち、色黒のような肌の色の明るさに関する悩みであれば、心的イメージの中でも特に明るさに関わる部分との関連が深いということである。色みについても同様であり、特に色みの部分に影響を及ぼすことがTable 7-2から読み取れる。

しかし、色黒に悩み回答者が、自身の肌の色みについて「黄み」寄りの判断をするという点は例外であり、明るさに関する悩みが異なる属性の色みにまで影響したことになる。この点に関しては、悩みによる群の構成を改めて確認する必要があるだろう。Table 8は各群の構成をクロス集計した表であるが、色黒に悩みを持つ群（26名）の約3割（7名）が黄みに対する悩みも併せて持つことが捉えられる。従って、肌の明るさに関わる悩みが心的イメージの色みにまで影響を及ぼ

したというよりは、色みに対する悩みの影響が直接的に見られたものと考えられる。

本研究においては、冒頭の仮定の通り、肌に対する悩みと肌に対する心的イメージとの間には一部の要素について直接的な連関が見られたと言える。但し、本調査で心的イメージの抽出に用いたのは、色黒、色白、赤み、黄みなどの言語的ラベルであり、色票のような視覚的試料ではない。回答者自身による肌の色票の選択結果と客観的な測色結果を比較した先行研究においては、肌の悩みと予測-実測間のずれの特徴との間に顕著な関連が見られていないため（山田, 2015）、本結果の解釈にあたっては、言語的ラベルにおけるものであることを今一度意識せねばならないであろう。なぜなら、例えば「色黒」を選択した人物全員が、実際に同じ色を心に抱いているとは限らないからである。しかしながら、「色黒」を選択する場合には、答える人自身の何らかの基準において「色黒」の方向性を持つことを示すのであり、より意識的な過程を通じたアウトプットであるとも言える。このように、より意識を介する場合において悩みとの連関が明瞭になる、として本結果を捉えるべきと考える。

また、本調査の対象者は36名と極めて小規模であるため、結果の過大解釈には注意を要する。群間比較の分析についても、各群の構成人数にばらつきがあり、データ規模による影響が生じた可能性も皆無ではない。本研究で得られた種々の傾向は飽くまで一可能性として捉え、対象拡大の上で追調査を行うことが不可欠である。

Table 7-1 色黒に関して悩みがある回答者の特徴

	明るさ	色み
対：回答者自身の肌	回答者自身の現在の評価が色黒寄りとなる傾向	回答者自身の現在の評価が黄み寄りとなる傾向
対：男女の肌	理想の男性肌が色黒寄りとなる傾向 (cf. 悩みがない群は、平均的イメージよりも理想の方が色白)	なし

Table 7-2 肌の色みに関する悩みがある回答者の特徴

	明るさ	色み
対：回答者自身の肌	なし	自身の現在に対して悩みと同方向の評価、理想は悩みと逆方向の評価
対：男女の肌	なし	男女を問わず、黄み赤みの方向性が不明確で中庸 (cf. 悩みがない群は、黄み方向の回答)



Table 8 肌の悩みのクロス集計表

		肌の明るさの悩み		合計
		色黒悩みなし	色黒悩みあり	
色 悩 みの	黄み悩みあり	4	7	11
	赤み悩みあり	2	4	6
	色み悩みなし	4	15	19
合計		10	26	36

## 5. まとめ

日本人女子学生36名を対象とした調査結果を分析したところ、次の傾向が得られた。

- ・自分自身の現実の肌の自己評価に比して、理想の肌はより色白でより赤みとなる。
- ・男女の肌の心的イメージでは、女性の方が色白でやや赤み寄りであり、男性が平均と理想とでほとんど心的イメージが変化しない一方、女性には理想において一層の色白肌が求められる。
- ・色黒に悩む回答者は、回答者自身の現在に対する評価が相対的に色黒寄りで黄みに寄る。
- ・肌の明るさに関して悩みのない回答者は、男性の平均的イメージよりも理想の方が色白に近づくのに対し、色黒に悩む回答者は、逆に男性の理想的イメージとして、やや色黒の肌を求める。
- ・赤みに悩む場合にはより黄みを、黄みに悩む場合には赤みを、のように、肌の色みに悩みがある回答者は、自分自身の肌の理想として現実に対する自己評価とは逆の色みを求める。
- ・自身の肌の色みに悩みがない群は、赤みや黄みなどの悩みを持つ群に比べ、他者としての男女の肌に対して黄み寄りの心的イメージを持つ。

## 参考文献

Bartleson, C. J. "Memory Colors of Familiar Objects," *Journal of the Optical Society of America*, 50, 1960, pp.73-77.

児玉晃, 棟方明博「肌色の諸特性」『日本色彩学会編. 新編色彩科学ハンドブック第2版』 東京大学出版会, 1998.

- 鈴木恒男「好ましい肌色を規定する要因の解析」『日本色彩学会誌』21(1), 1997, pp.25-33.
- 山田雅子「膚色における性差－自己の肌の概念色と実際の色」『埼玉女子短期大学研究紀要』19, 2008a, pp.249-261.
- 山田雅子「肌の意味, 肌の価値」『コスメティックステージ』2(3), 2008b, pp.69-73.
- 山田雅子「肌の記憶色における特徴抽出」『埼玉女子短期大学研究紀要』22, 2010, pp.41-53.
- 山田雅子「自己の肌の心的イメージにおける個人差－日本人若年女性の予想・実測間比較に基づく分析－」『日本色彩学会誌』39(3), 2015, pp.109-120.
- 山田雅子「言語表現に見る日本人若年女性の肌色観－男女の肌の明るさと色みの捉え方－」『日本色彩学会誌』41 (印刷中), 2017
- 柳瀬徹夫, 児玉晃, 中田敏子, 矢部和子「膚色の記憶色に関する研究17(1), 1970, pp.2-17.